氏　　名	趙　麗華
学位の種類	博士（デザイン学）
学位記番号	博甲第　８７３８　号
学位授与年月	平成　３０年　３月　２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	中国延辺朝鮮族自治州の民俗村における文化的観光デザインの構築
主　　査	筑波大学教授　博士（工学）　花里　俊廣
副　　査	筑波大学教授　博士（デザイン学）　五十嵐　浩也
副　　査	筑波大学准教授　博士（工学）　山本　早里
副　　査	株式会社日建設計主幹　博士（デザイン学）　張　健

論文の内容の要旨

趙麗華氏の博士学位論文は、中国延辺朝鮮族自治州の民俗村で行われている観光活動の調査を通し、文化的観光デザインの要素とその社会的意義、これからの民俗村のあり方を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第１章では、研究の背景と目的、方法を述べている。今日、農村の縮小・消失が深刻であり、その中でも地域の独自文化を保持している伝統村の高齢化・空洞化が懸念されていることを指摘している。中国において移住民族である朝鮮族は、現在の北朝鮮北部の伝統的文化を礎としているが、改革開放後、中国社会の社会主義現代文化と韓国社会の資本主義韓流文化の影響を受けていながら、独自の文化を形成・伝承しており、中でも延辺の伝統村では、朝鮮族の文化を観光資源とする民俗村の形成が行われ、村の振興を図ろうとしていると述べている。そのため、本研究の研究対象地を中国延辺朝鮮族自治州（以下、延辺）とし、研究の目的は当地域の民俗村で行われている観光活動の特徴をまとめ、文化的観光デザインの要素と社会意義を考察し、これからのあり方について明らかにすることとしている。調査対象地を延辺地域の白龍村、金達萊民俗村、紅旗民俗村の３つの民俗村とし、文献調査と現地調査により調査を行うこととしている。文献調査では、朝鮮族の移住史と伝統村、民俗村の形成について考察し、現地調査では、観察調査、インタビュー調査、アンケート調査を行うこととしている。

第２章では、朝鮮族の移住史は移住初期、中期、後期にまとめられることを指摘した。移住初期は、災害型・自発型移住時期であり家族と村単位での移住が行われ共同体意識が比較的高く、移住中期と後期は、それぞれ、政治型移住時期と半強制的管理型移住時期であり、異なる出身地から形成された村であるため比較的低い共同体意識で結ばれていると

述べている。

第３章では、民俗村の形成要素は共同体意識と周辺観光地の影響を受けていることを明らかにしている。共同体意識が比較的高い白龍村の百年部落は村民が運営主体となっていて、村民の参画が積極的であると述べている。一方で、周辺観光地の影響から形成された金達萊民俗村と紅旗民俗村は、前者は企業と政府（村委員会）による共同運営、後者は企業による運営であり、両者とも村民の参画が比較的少ないことが特徴であると述べている。民俗村で行われている観光活動をまとめた結果、文化的観光デザインの要素を伝統文化、民俗芸能、商業型観光活動、村民の参画に分類している。

第４章では、伝統文化の資源化を、伝統家屋、伝統色、朝鮮族服飾、伝統風俗に分けてまとめ、民俗芸能の資源化については、遊び型と歌舞型にまとめている。現地調査から、伝統文化は体験を中心としていて、商業型観光活動が多いが、民俗芸能は鑑賞型イベントで、観光客の満足度が高いものの、無償鑑賞が多いことを指摘している。

第５章では、村民主体の民俗村である百年部落における観光客のアンケート調査から、運営前期である４～７月では、継続性が高い地元の観光客が多く、日帰り観光が中心となっていて、専門性の高い民俗芸能を求めていること、運営後期である８～10月は、他地方の滞在型観光客が多く、より詳しい観光情報の提供が求められていることを明らかにしている。

以上の調査から、文化的観光デザインの要素四分類に基づき、村民主体の民俗村では伝統文化、民俗芸能、村民の参画を中心としている一方で、企業と政府主体の民俗村では、民俗芸能と商業型観光活動を中心としていたことを明らかにした。このようにして、特に伝統文化が伝統村の活性化を図るための資源として重要な役割を果たしていたことを明らかにした。さらに、移住民族が移住地域において独自の文化を継承していくには、文化的観光デザイン、特に伝統文化を核とした観光活動が重要であること、また、民俗村の運営主体が異なるために商業型観光活動と村民の参画に差異があることも指摘し、これらから民俗村の発展には民俗村間の連携が必要で、各民俗村の特徴を生かした交流を通しての、お互いが競争相手ではなく共生を図るものとして伝統文化の継承を目指すことが重要であると結論付けている。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文は、少数民族が文化を継承していくための手段の一つとして文化観光デザインに着目した点が独創的であり、形成の経緯や実施主体が異なる３つの民俗村を調査対象地として、多くの現地調査、文献調査を行った労作である。特に、現地に逗留して得た詳細な観光内容と、村民へのヒアリング調査や観光客に対するアンケート調査によって明らかにされた満足度とを関連付けて考察した結果、効果的な文化観光デザインを提示している点は意義が大きいと評価できる。

平成 30 年 1 月 31 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。